

須山 浅間神社

富士山南口下宮

富士山世界文化遺産



樹齢五百有余年の御神木



左 大永4年(1524)の棟札(市指定有形文化)
右 慶長16年(1611)の棟札(市指定有形文化)



国府犀東 七言絶句詩碑

世有汚隆野有賢 汚隆齊仰岳之蓮
高高師表岳蓮在 猶且雄姿待霽天



道興准后歌碑

よそにみしふし のしら雪 けふ分ぬ
心のみちを 神にまかせて

鎮座地
相祭神
由緒

静岡県裾野市須山柳沢七三二
木花開耶姫命
天津彦火瓊杵命
天津彦火瓊杵命
天津彦火瓊杵命

大山祇命
大山祇命
大山祇命
大山祇命

当社は社伝旧記（慶長三年一五九八 渡辺対馬守安吉）によると景行天皇（一一〇）の時代、皇子日本武尊が蝦夷征伐のとき、この地を訪れ浅間神社を創出し、更に欽明天皇十三年（五五二）に蘇我稲目が再興したとある。

何れにしても古くより、山岳信仰として「富士山」を御神体として仰ぎ奉っており、当時の度重なる噴火とも関連し山麓に浅間大神を祭り岳神の霊を慰め奉ったのが始まりと思われる。

その後、天元四年（九六一）平兼盛が神社を修理している。

武門の崇敬も篤く、建久四年（一一九三）にこの地にて巻狩をしている、源頼朝を始め武田信虎、勝頼、今川家代々の戦勝祈願から、徳川時代になると小田原城主より毎年幣帛が贈られている。

正治二年（一一〇〇）大宮（富士宮）浅間神社大宮司の筆記によると、「登山口者東口珠山 南口大宮 北口吉田 右本道三筋此外無道云々」とあり、珠山は須山で、当時下山道専道だった須走口が後年登山道になったので、須山口は富士登山道南口となり、浅間神社も南口登山道の下宮として祭られるようになった。

その後、何回かの修理改築を行っているが最古の棟札は大永四年（一五二四）のものであり、文政六年（一八二三）には本社の再建を行っている。

また境内右の古宮は慶長六年（一六一一）に建立された、以前の本殿と思われる。当神社の歴史は富士登山道との関連が非常に深い。勿論古来より祭神として祭る大山祇命の娘「木花開耶姫」は、夫婦円満、安産、子宝の神として、信仰が厚く諸人の崇敬を集めていた。

江戸時代となり「富士講」が盛んになるに従い、登山時の参詣の道者も少なくなかった。

しかし、宝永四年（一七〇七）の大噴火の際、登山道が崩壊し登山不可能となり、以来安永九年（一七八〇）の登山道の完全修理ができるまでが当社の最も衰えた時期である。

その後、寛政年間には山室も整備され登山者も年々増加し、神社の復興も行われた。庚申年の寛政十二年（一八〇〇）には、五千三百九十八人の登山者があつたと記録されている。

当時の富士登山で忘れてはならないのが「御師」の存在である。登山の世話役として宿泊設備の提供、馬や役務の提供等をし、更には神社の信仰を広める者として大いに活躍し、またこの地域の経済にも大いに貢献した。ちなみに「御師」は十二軒あつた。

文人墨客の訪れも多く、文明十八年（一四八六）には聖護院二十八世道興法親王が当地を訪れ、すはま口といふより、富士の麓にいたりて雪をかき分けて、「よそにみしふしのしら雪けふ分ぬ 心のみちを神にまかせて」と廻国雑記に記されている。

また昭和九年には、宮内省御用掛で漢詩人である国府厚東先生が当地を訪れ「世有汚隆野有賢 汚隆齊仰岳之蓮 高高師表岳蓮在 猶且雄姿待霽天」と七言絶句の漢詩を詠じている。

明治に至り、東海道線の開通により御殿場登山口の開通や大野原を通る須山口登山道が旧陸軍の演習場になるなどして、須山口登山道は衰退の一途を辿ってきたが、平成九年に須山口登山歩道として整備され、富士宮口五合目に通じる登山道口となり、毎年七月一日には記念登山を行っている。併せ一合目にある胎内神社への参拝を行っている。

境内には五百有余年の老杉がうっ蒼として幽邃を極め、神社庁の御神木に指定され、その社叢は市の天然記念物になっている。また平成二十三年には国の史跡に指定され、平成二十五年六月に、富士山世界文化遺産の構成資産ともなる。

祭日
神事

春祭り…四月十七日 秋祭り…十一月二十三日
元旦祭…一月一日 開山式…七月一日
閉山式…八月三十一日 大祓式…十二月三十一日